

京伝『復讐奇談安積沼』ノート

山本和明

はじめに

京伝の『安積沼』論の現状をみるに、山井波門の仇討と小はだ小平次の幽霊譚の二系統に分かれること、そしてその二系統が有機的に反応していないことがよく云われている。⁽¹⁾研究のある程度の成熟によつて解明されている典拠群。その二系統のうち、とりわけ小はだ小平次に重点が置かれ、論じられていることが多いことも指摘できよう。

たしかに、『安積沼』以後の文芸・演劇への影響を考えるならばそれも仕方がないのかもしれない。馬琴は云う、「この比よりして、よみ本漸々流行して遂に甚しくなる随に、京伝か稿本を乞て板せんと欲する書買からす。これにより又安積沼五巻を綴る△画は重政也▽こは俳優小幡小平治が冤鬼の怪談を旨として作れり、いよく時好にかなひしかは、売ること数百部に及ひしといふ」(近世物之本江戸作者部類⁽²⁾)と。その後の南北劇、絵画、隨筆などにみる人々の好奇心な視線を考えるならば、まさに時好にかなつたものとして小はだ小平次の幽霊譚が存在したのである。研究は小はだ小平次伝承を巡つて、今日なお考察をめぐらせているといつてよいのかもしれない。

しかし、そのことで『安積沼』構想を十分に考察したことにはならないのではないか。例えば問う——なぜ陸奥に舞台を設定したのか、言い換えるならば、なぜ山井波門は陸奥を旅しつつづけるのかと。又問う、なぜ小はだ小平次は

安積沼と繋がるのか。後述するように、△陸奥▽という舞台が採られなくてはならない必然性を、一連の小平次伝承の側に求めることはできない。京伝の『安積沼』構想を考える上で、バラバラな印象を受ける二系統がなぜ一つの作品として纏めあげられているのかは避けては通れぬ問題であり、△陸奥▽がそれを解く鍵なのではなからうか。本稿では『安積沼』構想をさぐることを目的とし、以下、さまざまな角度から検討を加えて、私説を述べることにしたい。いきおい論証としては不十分なものとなろう。「ノート」と称した所以である。

小平次伝承の解体

『安積沼』構想を理解するために、我々はもしかしたら今日の、△小平次伝承▽の呪縛から解放されねばならないのではないか。

幽霊もちらと見物仕候所、中出来ト奉存候。小平次之事、原来なき事ニ而、万犬虚ヲほゆるのたぐひと存候間、三願ナトなんのかのとはなしいたし候モ、耳ニとゞめ不申候。五人ニきけバ五人之口ちがひ、犬の声ニほゆるニちがひなくと奉存候。モトヨリ△評判記ナドミるニ▽小ハた小平次ト申ス役者、下役者ニも一向無御座候。但シ、元禄中、生嶋新五郎弟子ニ、生嶋小平次と申やくしやあれども、これも小ハた小平次と申したしかなる証モなし。旅役者ナドニ少しの怪談ありしヲ、いひはやらしたる事トぞんじられ候。証ナキ事ハ、はなすニたしかならず候間、書留モいたし不申候。ふきや丁へんニて、知つてゐるト申者あれども、ミなたしかならず。虚談多御座候。(中略)小平次事 すゑヲはなすと怪があるとはなさぬといふ事ヲ、はじめてはなし出したやつが妙ニて御座候。すゑハはなさぬといふもの、すゑヲしつたもの一人もなし。

〔天理図書館蔵山東京伝書翰〕⁽³⁾

竹垣柳塘宛京伝書簡からの引用である。京伝だけではない。「もとこの話一向あとかたなき童話にて、予(山本註)喜

多村筠庭）稚きときふるき老婆が語りきかせしは、小平次という魚売、常に小はだを售れり。それが怪物に出あひたるをさなき物語なり。俳優にて旅あるきせしといふは、安積沼のよみ本脩をなしたるなり。柳亭に此の事をかたりしに、彼も昔話をしらずといへりき。」と『武功年表補正』に記されている。考証随筆に名を残した喜多村筠庭と柳亭（種彦）、この二人をもつてしても小平次伝承は知られざる存在なのである。

小平次伝承を架空の存在と位置付けてみることに――作業仮説的なものにはなるが、一旦そこから出発点としてみることにしよう。小平次伝承を無いものと仮定したとき、多くの従来説が戸惑いをみせるのではないか。無いと考えて、小平次伝承を捉えなおすことで、こういった地平が開けてくるのだろうか。

まず『安積沼』における小平次伝承を幾つかの要素に分けてみる。全十条中、五条に小平次は登場するが、はじめて登場するのは巻二第四条においてである。

爰に又おなじ頃江戸木挽町に鰻鱺太郎兵衛といふ俳優ありけり仏舍利といふ雜劇をせしより名人の誉高く聞えたる者にて是乃森田芝居の始祖なりかれが弟子に小鱧小平次といふ者あり俳優の業は至極下手なるゆへに江戸の大歌舞伎へは出ず諸国の田舎芝居にやとはれ去ていとまづしく世をわたりぬかれが譚名を小鱧といふ事いかなるゆへとたづぬるに師は鰻鱺太郎兵衛といひて芸の味ひよき名人なれども彼は芸の味ひいやく下手なるゆゑに鱧にもおとれりと云意にて小鱧とはいひけるよしこれ芸の巧拙を魚の味ひにたとへたる譚名也一説には彼山城国宇治郡小幡の里の生れなるゆへに小幡小平次といひしとも云ふ此説実ならん乎又小平次芸におゐて尽く下手なれ共唯一ツ幽霊の狂言のみは別に妙ありて名人の俳優もおよばずゆへに幽霊小平次ともいひけるとぞ

〔第四条 鰻鱺太郎兵衛小鱧小平次事并了然尼相波門説因縁事〕

江戸禰宜町の森田芝居考証のあと、森田座始祖の鰻鱺太郎兵衛との対比からなる命名根拠を示し、かつ幽霊芝居に妙のあることを提示する。この幽霊芝居に得意なことが、のちに巻三第六条において陸奥の錦木塚で幽霊役として活躍

することの伏線となっている。巻三第六条の典拠が『通俗孝肅伝』であることは既に報告されているが、文字通りその構成を踏襲しているのである。その登場の場面では「此頃小平次当地に芝居ありてやとは来り」とある。田舎芝居に雇われる存在とはいえ、小平次が陸奥に来ていることに唐突との印象は免れない。他の三条——すなわち巻四第七・第八條が独立した挿話の如き印象を与えること、巻五第十條が付けたりのような表現に終始しているを考えると、見方を変えて、小平次の登場そのものが、作品全体の中での役割として、この場面の幽霊役を担わせることにあつたといつても言い過ぎではない。

ただ、京伝は小平次を単なる端役にとどめることなく、巻四で主だった登場人物においた。それは、先述のように作品全体からみれば独立したものであるが、それゆえに最も影響を与えた箇所でもある。巻四での役割として①安積沼での水死（実は殺人）、②死骸の手首の趣向、③幽霊の故郷への帰郷、④妻お塚の怪死といった要素に分解できよう。陸奥へ旅芝居のために赴いた小はだ小平次はそこで殺され、魂となつて故郷の江戸にもどり、悪人達を罰する。徳田武氏の指摘に従うならば、②は山口輝雄の読本『町摩私記』（未見）からであり、④は従来指摘されるごとく『雨月物語』の借用ということになる。⁽⁶⁾その流用は、小平次の恨み心を表現して巧みといえよう。

さて、②④が他作品からの借用であつたならば、いわば「小平次」伝承の原型と目されるものは①③に含まれることになる。この点に関して従来の研究は様々なデータを提示してくれている。山崎美成『海録』巻三十四九、宮崎成身『視聴草』続二集之十、根岸鎮衛『耳袋』巻之四「戯場者為怪死事」及び巻之十「小はだ小平次事実の事」、刊行されたものとしては寛政十三年刊『東遊奇談』¹⁷⁾も存在する。その成立年次に関しては中々難しい問題が存在するが、天保八年成立の『海録』の記事を『視聴草』が視ていることは確実であるし、根岸鎮衛『耳袋』巻之十「小はだ小平次事実の事」は京伝作品以後の記録にほかならない。京伝作品以前の記事と云われているのは『耳袋』巻之四、「東遊奇談」が確実なところで、『海録』記事も吉田雨岡・耕書堂の生没年から京伝作品以前成立と推定されているようである。

その中で唯一「小はだ小平次」という名前を用いているのは『海録』だけである。しかし、若干注意を払う必要があらう。『海録』中の吉田雨岡・耕書堂の発言を、当時の発言そのままとするには疑問が生じるのである。まず文中で、美成が「小はだ小平治が伝未詳」としている点、また「京伝丙寅のとしの合巻に、浅香沼後編お六ぐしといふにこはだ小平次をかきしはこの沼の縁によれるにや」と書いている点など記憶に不明朗な点が存在すること、なによりもまず美成というフィルタを通しての二人の発言であることが気に掛かる。先の京伝の発言を考えあわせるならば、こうした事件と関わる「小はだ小平次」という人物など存在しなかったともいいうるのである。無論、名前だけが問題なのではない。ただ一連の小平次伝承が単に無名の人物のエピソードから創られる可能性をみたいのである。

それでは「小平次」という名はともかくとして一連の伝承のコアとなる話がどのようなものであったのか。『耳袋』巻之四「戯場者為怪死事」を例に、具体的にまとめてみると次のようにならうか。

「寛政八辰年春より夏へ移りし」頃のこと、「伝馬町に住居せる旅芝居等の座元などして国々を歩行けるもの、行徳にて芝居興行」をし、芝居が済んで船で行徳海岸を渡っているとき、「如何なしけん、右座元海中へ落しやわずかの船中にて行衛なくなりし故」、他の者は探したが「死骸も見えず」、仕方がないので江戸に帰り、座元の女房に報せに帰った。女房の「何故遅く帰り給ふや。内にては今朝戻られたり」というのに不審に思い、二階に女房に上がってもらったところ女房は「わつといふて倒れ臥しける故」、正気づかせ尋ねたところ、夫が「此事はかたく外へ洩す間敷よし口留せし故」話さなかったが、無理に尋ねたところ女房が二言三言語りだした。すると、二階の上で大石を落とすような音がしたので恐ろしくて聞き果てることができなかった。

『東遊奇談』も併せ考えるならば、ここには多くの可変項目（変更しうる項目）が含まれている。しかし総括的に云って、こうした内容が小平次伝承を形づくる核となったものだったのだろう。なによりもこの伝承の眼目（即ち不変項目）は、というよりも京伝の見聞きした伝承は、先の符号でいう③と、話をすれば祟りがあること、だったのでは

ないだろうか。少なくとも京伝はそう理解していたようである。『安積沼』の次の文を参照いただきたい、「此後雜劇に管的小平次が死霊の物語をする人あれば必怪事ありとて雜劇の人はおそれて語る事なし。ゆゑにつばらには世にきこえず」と一老人の説話を聞、導善除惡の一助にも聞きしまゝにしるしつけぬ」(巻四第八条末尾)。しかし、先の京伝書簡の「すゑヲはなすと怪があるとはなさぬといふ事ヲ、はじめてはなし出したやつが妙にて御座候。するハはなさぬといふもの、すゑヲしつたもの一人もなし」という発言を思い合わせていただきたい。『安積沼』の好評につき、文化四年正月に刊行された合巻『安積沼後日仇討』後編十四丁表の一節に云う、「ふとそらごとをいひつたへしより一犬きよをほへて万犬につたへ人／＼のこゝろにあやしみを生るゆへにおのづから目にあやしみさへきるなりあやしきをみてあやしまざればあやしきことなしといふ古言うべなり此ことをよく／＼世の人につたへたまはれかし」という例も含めて、京伝は一貫して△小平次伝承△の存在を否定していたのである。

このように、作業仮説ながらも小平次伝承を架空の存在と位置付けてみることによつて『安積沼』を構成する一系統は、様々な巷説を収斂したものとして成り立ち得ることが確認できた。その総括する命名としての「小はだ」「小平次」。「小はだ」は先に触れたように京伝の森田座考証との関わりからの洒落と目される。「小平次」はどうか。物語を通読するに、「小平次」という命名そのものがエピソード全体に与えた影響といえ、最後に息子の小兵衛が俳優として道化の名人となり「坊主小兵衛」として其角の句にも詠まれる名人であつたという点に繋がる意義しかない。⁸⁾むしろ事態は逆の様相を持ち、京伝が『近世奇跡考』で記した「小兵衛」考証と物語世界を結びつけるために「小平次」と命名したと考えるべきであろうか。己れの考証の産物を物語世界の架空の人物の存在証明に利用する。「虚」としての小説世界を「実」に転換するための手法である。

さて、このように小平次伝承を様々な巷説の集合体として捉えなおしてみると、次に問題として浮上してくるのは、では何故にこうした一連のエピソードとして記されねばならなかったのか、話の展開上、このエピソードがどう

いう働きをなしているのか、であろうか。

整理をする。小平次伝承の『安積沼』における役割とは、まず第一に、巻三の「幽霊」という要素であった。この「幽霊」という展開は典拠の中国種との関わりであり、その典拠そのままにアレンジすることがなければ「幽霊」を演ずる存在が必要であった。しかし巻四の一連のエピソードはどうか。一見するに物語全体から独立している観すらある。元々、小平次伝承が存在していたのなら、それをそのまま利用したと云えようが、今回考察したように、様々な巷説の集合体とするならば、なぜ巻四のエピソードが語られなければならないのが浮上してくる。強いてこのエピソードを用いた理由を現段階で考えるならば、役者に関わるエピソードの集合体という纏めはできるだろう。符号③のエピソードは、確認される限りにおいて役者にまつわる話という点ではどれも共通しているのである。

しかし、それにしてもなぜ陸奥の「安積沼」でなのか、安積沼と小平次を結び付けるものはいったい何なのか、といった点は依然として疑問に残るのである。みちのくに場面を設定し、そこで幽霊役を演じた。だからみちのくの歌枕でもある安積沼を舞台にし、水死させたのだ——たしかにそうも云えよう。ならば、問われるであろう。どうして陸奥なのか。恐らく、陸奥を配置した理由は小平次の側に求めることはできない。冒頭に記した疑問にこたえる鍵はどうやらもう一方の側、山井波門の仇討にあるようである。

山井波門伝承の可能性

一体、この物語はなぜ舞台を△陸奥▽に設定しなくてはならなかったのだろう。極端な物云いかもしれないが、敵討の場所はどこでもよかったのではなかったろうか。

山井波門はあけくれ仇人雲平がゆくゑを聞出さばやと心を苦めける処に陸奥に逃下りて彼地にかくれ住よし聞出して飛立ごとくに思ひいそがはしく家をとりをさめはるけき道を陸奥に下りけるが仇人南部にありとのみ聞てこ

まやかなる事を知らず広国の事にて速に探索べき便もなければ權且此地にとどまりて窺ふべしとおもひさだめ

〔卷三第五条 希婦細布暗媒佳会事并信夫摺絹注血告想事〕

ここにみる一文がまさしく物語の舞台を△陸奥▽に定めたものである。表層的にみて、その必然性は全くといっていいほど感じられない。先章にみたように、小平次伝承の原型においてもそれは△陸奥▽を舞台とする必然性はなかった。

にもかかわらず、やはり舞台は陸奥でなければならなかったのだと思う。△陸奥▽であることが二系統を結びつける手立てなのだと考える。はじめに△陸奥▽ありき——これが私の下した推論である。作品構造の中からはそうとしか云えないものを感じてしまうのである。以下、その憶説を述べていきたい。

※

※

山井波門の仇討ちに関しては、従来さほど取り上げられてこなかった。「山井波門の復讐譚は、寛政中頃からの草双紙における敵討物の流行に乗ったもの」という徳田武氏による評価が唯一のものとも云えよう。⁹⁾

この山井波門とは何人であったか。安房国那古村生まれと設定され、江戸禰宜町、陸奥狭布里、(青森の湊)、羽州男鹿山、最後は大和国へと移りゆく。名前も安西喜次郎、玉川歌仙、山井波門、穂積波門と次々と△改名▽をしていく。いうなれば移ろいゆく存在として設定されているのである。その設定、即ち命名と地名はあたかも連動するかのよう、物語内容に関わりを持つ。まず、波門の生まれは安房国と設定されていた。このことは巻之五で泳ぎに達者という設定で初めて生きてはくるが、それだけである。むしろ波門(喜次郎)の生い立ちを穂積丹下に伝える語り部、菱川師宣に惹かれての設定と考えられる。京伝の一連の「菱川師宣」考証の中で得た成果——安房国保田村の生まれというその考証結果が、喜次郎をして同じ国の人と設定させたのであろう。馬琴の『八犬伝』を挙げるまでもなく、安房里見家をめぐる史的事実との関わりから「安西」という姓は登場しうるものとも云える。

江戸禰宜町という設定はどうか。禰宜町に関しては本文中に多くの紙数を割いて元禄時代考証がなされている。京伝自身興味をもっていた演劇考証との関わりから、その地を舞台とし、そのことと連動するように歌舞伎役者考証として、玉川千之丞の弟子という設定がなされている。二者ともに、いわば京伝の考証成果の投影とみるべきであり、ある種の「こじつけ」的命名であった。我々の読み取るべきは、そこに示された考証成果の側なのかも知れない。

注目すべきは山井波門の名である。この名への改名箇所には次のように記されている。

たとひ仇人天に路ありて上り地に門ありて入るとも我一念の誠をもつて探出し速に頭をとりて父等が冤魂を慰すべしかく身まゝになるうへは一日もしのびがたしと飛立やうに思ひけれども仇人いづくに逃去しや露ばかりも心あてなければせんすべく且吉日をえらびて元服し本性を名告ては仇人にそれとしられんをおそれ姓名を更て山井波門とぞ呼ける

〔巻二第四条 鰻鱺太郎兵衛小鱸小平次事并了然禅尼相波門説因縁事〕

この改名は、他の名とは異なり、すぐに直接的な命名理由が示されていない。ただ、この命名は巻三で、次のように物語へ働きかけてくるのである。

安積山影さへ見ゆる山の井の浅き心は我おもはななくに 波門つらくよみおはりて思ひけるはこれは万葉集にのする処の歌にてむかし葛城王当国にくだり玉ひし時采女なりける女のみて奉りし歌也我性を山井といひ彼が名を秋といふより山の井の秋とつゞきたる此歌をかきて心の真をあらはさんとす又信夫摺の絹にしろせしはかくまでにおもひを忍び来ぬといふ謎なるべし

〔巻三第五条 希婦細布暗媒佳会事并信夫摺絹注血告想事〕

ここに明らかにするのは「山井」という姓の背景には万葉集（古今集）の歌「安積山影さへ見ゆる山の井の浅き心は我おもはななくに」が関係しているということである。歌例を挙げるまでもなく、「山井」から「安積山」のみが連想されることはありえず、むしろ「安積山」の歌から「山井」が導かれたと考えてよいところであろう。つまり「山井」

という姓の命名根拠に、△陸奥▽の安積山が大きく関与していたのである。

先にも述べたように波門はどこで敵討をしてもよかった。ならば、その旅を△陸奥▽に設定したのは結果的にそうなったというよりは、まず「安積山」などの地名が想起されていたといえるのではないか。さらに注目したいのは、山井波門の命名根拠として位置付けた万葉集の歌にある「安積山」の歌も物語内容的には、お秋の恋情を述べるために突如として登場していること、また波門と「安積山」は以後何ら関わることなく、その関係は小平次の側に引き継がれていることであろう。京伝は「安積山」を語りたかった、ひいては△陸奥▽を語りたかったのである。

このことは別項目に関しても云える。例えば巻三のエピソードを考えてみよう。これは波門が狭布里に行き、お秋との間に恋愛関係が生じ、僧にお秋が殺されることによって事態が展開し、その解決に小平次が幽霊役として登場するという二系統を結びつける意味からも意義深いものであった。しかしその内容は先述の如く、殆ど『通俗孝肅伝』そのままなのである。なぜ京伝がこの話を導入したのだろうか。思うに、この『通俗孝肅伝』の話は偏に「布」にまつわるエピソードなのであり、『安積沼』で、布から「狭布里」が導かれたのではなく、「狭布里」からこのエピソードが導かれたと思われるのである。

このように「安積山」「狭布里」など、△陸奥▽をはじめに考えることなしには『安積沼』の物語など成立しえない。はじめに△陸奥▽ありき。それでは、なぜ京伝はかくまでも△陸奥▽に拘っているのだろうか。

一般論的な言い方（巨視的な視点）から云うならば、やはり芭蕉の『奥の細道』の影響は無視できないであろう。西行五百年忌にあたる元禄二年（一六八九）三月二十七日、芭蕉は門人曾良を伴って江戸を出立、奥羽・北陸を巡る「奥の細道」の旅路についた。名所・歌枕・旧蹟をめぐるその旅の行程は芭蕉自身によってまとめられたものではあるが、その旅が「古人の跡を求めず、古人の求めたる所を求め」る旅である以上、内々のものでしかなくその紀行文も芭蕉の生前においては公の形、すなわち版本として登場することはなかった。芭蕉の亡くなった元禄七年（一六九四）

から八年後の元禄十五年（一七〇二）京都の井筒屋庄兵衛から出されたのが最初の刊行であり、多くの人々の耳目にふれ得たのである。その後、芭蕉追慕もあつてか、多くの文人・俳人が△陸奥▽へと旅立つ。例えば、先にあげた『東遊奇談』などは芭蕉の後をたどつた一無庵丈左の記録とも云えるものである。そして『奥の細道』刊行から一世紀、京伝の『安積沼』は享和三年（一八〇三）に刊行されているのである。巻三末尾に「俳諧士芭蕉が奥の細道に、須賀川の宿のかたはらに、大きな栗の木の下をこのみて、世をいとふ僧ありとかきて、世の人の見つけぬ花や軒の栗といひしは、此三七道心の事なりと、陸奥人の物語に聞きぬ。」とある。物語において殺されたお秋の父が須賀屋と名乗つていたことの命名根拠はここに由来するのである。いつてみれば『安積沼』には「奥の細道」の旅から一世紀を経た段階での祝祭としての△挨拶▽の意図が込められていたのである。

あるいは、内容的には万葉字の影響の方を重要視すべきかもしれない。中世歌学における俊成・顕昭に代表される万葉集からの本説取と新たな歌語の発見は、いま江戸時代に至り、再び散文世界において俎上に上るのである。その背景にあるのは、いうまでもなく宣長万葉学の大成など、近世知識人の研究対象として、万葉字が脚光を浴びていたこととあながち無縁ではないだろう。とりわけこの時期に橘千蔭の果たした役割は大きいように思われる。後述するように、千蔭の万葉集略解に関する京伝書簡も現存しているが、『万葉集略解』の普及は万葉集を手近なものとしたのである。そして歌学にみる△陸奥▽へのノスタルジアは、再びその話題性あるいは書物の広がりや相俟つて、人々をとらえて離さなかったのではないか。こうした流れが想定できるなら、京伝自身が影響されないはずもない。

この場合、真実として△陸奥▽がどうであつたかは問題ではない。結論めいた断定を下したところとて、それに対する反証など容易なものだろう。問題なのは、京伝が、何をフィルターとして△陸奥▽をみていたかであり、なぜそのような志向を持つに至つたかではないか。

『安積沼』にもどる。たとえば京伝が視ていたのは、江戸期の「安積沼」ではない。そのことは物語冒頭にある「い

づれの時代の事にかありけん」といった言葉、あるいは安積沼の説明箇所「此時までは広き大沼なりしが漸々にうづもれて今はかたばかり残り」とあることから明らかに明らかなであろう。「此時」とは物語内容の時代、「今」とはそれが語られる今、即ち江戸期と考えてよい。別の例を挙げよう。江戸時代、男鹿などは辺境の地ではなく、すでに幕藩体制に組み込まれていたのである。物語に描かれた世界像は、その意味で、現実とはかけ離れた、古き時代の、イメージの世界だったのである。のち京伝は合巻『安積沼後日仇討』の叙に「今は昔長祿の頃とかや。房州の孝子。安西喜次郎。千辛万苦して。父の仇轟雲平を打たる事。および小はだ小平次。姦夫の為。安積沼にて害せられ。その死霊姦夫淫婦をとりころしたる事は。復讐奇談安積沼といふ読本に記して前に著し。人の知ところなり。」と『安積沼』の内容を総括している。長祿の頃とは一四五〇〜六〇年代。読本『安積沼』がその中で「いづれの時代の事にかありけん」として元祿時代考証などをしていたことを思えば、まさにアナクロニズム、倒錯した設定と云える。その中で描かれた「安積沼」は渾々と水をたたえ、「狭布の里」では布が織りあげられているという。恐らく思うに、こうした形で築きあげられた世界は、まさに京伝の古代憧憬のあらわれではなかったろうか。万葉集・古今集などの歌枕世界をそのままに、その歌のもつ世界を再構築したものではなかったろうか。

だとすれば、山井波門には何かが投影されているとも考えられるのではないか。その解明ために示唆に富む一文を今一度引用したい。

波門つらく／＼読終りて思ひけるはこれは万葉集に載する所の歌にて昔葛城王当國にくだり給ひし時采女なりける女のみて奉りし歌なり我姓を山井といひ彼が名を秋といふより山の井の秋とつゞきたる此歌をかきて心の眞をあらはさんとす又信夫摺の絹にしるせしはかくまでに思ひを忍び来ぬといふ謎なるべし

物語においてお秋がこの歌を書き記している。ならばこの文にいみじくも示されているように、葛城王に波門は準えられているのではないだろうか——これが私の仮説である。万葉集に載る葛城王は「葛城王遣于陸奥国之時」と左注

にあるのみで、それが何人であるかは江戸期においても諸説存在していた。しかし「王」といい派「遣」される存在といい、それが貴人であることは疑いない。『大和物語』『今昔物語』など、ここから派生した物語も多い。ここでも同様に、京伝によって、「語られざる葛城王の物語」が創りだされたのだとも云い得るのではなからうか。実はそれだけではない。波門の背後には、古き時代に△陸奥▽を旅したと伝えられる葛城王のみならず、業平の姿をみることも可能なのである。

丹下ははるか所の所にありて暗に此少年をうかゞひ見るに年のころほひ十七ばかり面貌は花を塊たるがごとく身軀は玉を砌たるにひとしく気色和順粧扮風流真是男中の美人業平のわらは姿もこれにはいかでかまさるべき彼懸幅の絵姿と露ばかりもたがふ所なければこれ喜次郎にあらずして誰かよく此美貌あらん

〔巻二第三条 穂積丹下感孝義購少年事并游俠二見村西閼禰宜町事〕

既に佐藤深雪氏によって指摘されているように、業平にも奥州伝承が存在する。¹⁰⁰ 葛城王、業平、そして芭蕉。波門をめぐる話において多くの先人の名が登場している。波門に託された△陸奥▽を訪れる旅人をして、伝説の地名伝承の再△構築▽がなされていくのである。

さて、山井波門にこうした△陸奥▽への旅人の投影があると仮定した上で、考えなくてはならないのが、波門と、その相手の鬘児がその深層においてどう関係するかという点であろう。この点が問題として残る。

この点に示唆に富むのが高田衛氏の論である。¹⁰¹ 高田氏の論はこの『安積沼』全体の構想を考えた唯一のものといつてよいのであるが、高田氏が示された如く、物語を担う二人の間に『奥の細道』『近世奇跡考』を置くことによって、見えてくる視界が存在するのではないだろうか。

累と鬘児

鬘児は「大和国十市郡耳無川のほとり」の生まれという。ならば、この設定には万葉集の影響を考えなくてはならない。万葉集卷十六・三七八八〜三七九〇の歌三首を挙げる。

- ・耳成の池し恨めし我妹子が来つゝ潜かば水は涸れなん
- ・足引の山かつらの子けふゆくと我に告せば帰り来ましを
- ・足引の玉かつらの子けふのごといづれの隈を見つゝ来にけむ

『和漢三才図会』では「昔有女名鬘児而有三男同聘一女也因嘆息曰一女之身易滅如露三雄之志難平如石遂乃行耳無池之上沈没水庭於時其壮男等不勝哀情各作歌」とされている。妻争い伝説の一つとして語られるこの伝承では「かつらの子」は入水して果てたという。『安積沼』の冒頭、大和国十市郡耳無川のほとりに場所を選び、鬘児という女性を選んだとき、自ずと物語には万葉集にみる入水伝承が想起されるはずである。

京伝はどうやら女性の入水伝承に興味を持っていた。そのことだけは確実に云えるのではないだろうか。天理図書館蔵「すきやかし先生宛京伝書簡（壬十一月四日付）」に云う、

略解七之卷一冊返上仕候……さて見安ニ青衿七 麻衣に青衿つけて云々。右之歌全歌并注尺見申度、略解七ヲ恩借仕候所、右の歌相見え不申候。別卷ニ御座候や。右之歌 御覽御座候卷ヲ又々恩借奉願候。御六ヶ敷思へ候へとも相願候

水野稔氏は『山東京伝年譜稿』において本書簡を「文化九年」成立と位置付けておられるが、私は、その内容から考えて『安積沼』刊行の前年にあたる享和二壬戌年（一八〇二）ではないかと推測する。文中に云う「青衿」の歌とは、あの真間の手児奈伝承の歌である。それだけではない、既に指摘されるように、『安積沼』巻四の挿絵は京伝の考証随

筆である『近世奇跡考』の挿絵に構図などの点で合致するのであるが、その『近世奇跡考』の挿絵が「累怨霊図」と題して登場しているのである。真間の手児奈―累―鬘児。万葉集に登場する一連の入水伝承への興味のなかで、京伝は今回の『安積沼』で鬘児という女性を配備しているのである。

鬘児には累の投影がある。このことが挿絵などから明らかなこととして云えるならば、鬘児が『安積沼』に登場するには必然の理由があった。『近世奇跡考』に云う、

…案ずるに与右衛門堀越氏也。かさね実名ると云。累の字かさねと訓ずるゆゑにしかはよびけるならめ。法蔵寺の過去帳に俗名るとあるを以て証とすべきか。

○芭蕉が〔奥の細道〕に、下野の那須野にてちいさきものふたり馬の跡をしたひてはしる。ひとり小姫にて名をかさねといふ。聞なれぬ名のやさしかりければとかきて曾良が句に

かさねとは八重なでし子の名なるべし

とあり。これも累といふ名を訓にてよびしならめ。かさねといふを。聞なれぬ名のやさしとおもへるは、元禄の頃は羽生村のかさねが事、さまで世に聞えざりしにや。

〔巻之二（七）羽生村累古跡〕

芭蕉の「かさね」と累伝承の「かさね」。ここには何の脈絡もない。それが一編に結びついてしまう京伝の発想の飛び様からいえば、「奥の細道」の旅を顕彰する意図をもってつくられた『安積沼』で、奥の細道の目的地である△陸奥△に鬘児を配置することなど、容易ではなかったか。物語が鬘児―累―奥の細道と云う連鎖の中で繋がって行き、△陸奥△の地に登場する飛躍も強ち無理とは云えない。実にこの飛び様こそが京伝の小説作法の根幹なのである。

では作中、その入水のモチーフはどう投影しているのか。物語において、たしかに鬘児は一旦死ぬことになる。巻五で岩窟から逃れ出るときに水死するのである。しかし「零陵甦醒香」によって、物語としては蘇生を果たす。京伝の手法によくみられるように（例えば、雨月物語の利用の有り様をみよ）、男女という構成を逆転してみせたり、あ

る人物の担われるべき役割を別の人物が果たしたりということを考えるならば、ここで鬻児の本来担うべき「水死」を脇筋にあたる小平次が果たしているとは考えられないだろうか。この言い方には語弊があるう。小平次は元々存在しないとの前提に従うならば、そういう役割を担う存在として巻四の話は生成されたのである。それは物語を単調にしない、長編化する一つの手法とも云い得よう。ここに二系統が結合する存在根拠の一端をみるのである。巻三での幽霊役を担う存在を水死させること。『安積沼』はこの意味において小平次を導いてきたのである。

征服というモチーフ

先に波門には業平や芭蕉、葛城王の投影があるのではと指摘した。ここまではあくまでも仮定である。しかしそうみることで見えてくる地平の存在を以下述べておこう。

思うに、より積極的に波門の背景には葛城王の残像があるように思われるのである。『安積沼』を読むとき、なぜ物語が大和国ではじまり、陸奥を経て再び大和で閉じられるのか、この点が常に疑問として残っていた。なぜ陸奥なのかについてはこのノートにおいて述べてみたが、しかし逆になぜ大和なのか、なぜ「累」ではなく「かつらぎ」でなくてはならないのか、なぜ山井波門は家の再興を果たすことを第一義としなかったのか。様々な思いが駆け巡るのである。——わたしはここで一つの想像をめぐらすことにしたい。

きっかけは物語の末尾にあった。

又山井波門は雲平が首級をたづさへて房州にいたり父の墓にそなへて霊を祭りたゞちに便船を得てかつらことゝもに大坂に着岸し大和にいたりければ穂積夫婦は泉下の人の再来したるこゝちをなし吉日を以て婚儀をなさしめ穂積波門と名告しむ兩人父母に仕へて孝を尽し夫婦の情益厚くつひに三男二女を生ければするの男子に安西の姓を名告せて実父の家を起し夫婦ともに長寿をなし子孫繁茂して富栄けるとなん都是波門が孝義の全き皇天に通じ

たるがゆゑなるべし

〔巻五第十条 脱虎穴避龍潭波門報仇事并榎本其角復花之句事〕

物語の末尾において、とりわけ江戸時代の作品が寿ぎのことばによって締め括られることはいうまでもない。ここでもその常套的な終わりがたをしていってよいのかもしれない。それゆゑに見過ごしてしまうような言葉に、あえて拘つてみたいのである。

それは「皇天」という言葉である。あえて「太平の世」と云わぬところに何を見ればよいのか。

高橋富雄氏の言に従うならば、物語の舞台である大和国十市は大和六県とよばれ、大和朝廷の第一直轄領であつたという。¹³ その六県の一つに「葛城」も存在する。「葛城」にしろ「かつらご」の故郷である「十市」にしろ、大和朝廷の発生に関わる場所であつた。万葉集・古今集の東歌みちのく歌には、地方の大和朝廷への服属の意味が込められていると云う高橋氏の言葉を借りるならば、「葛城」王と「鬘児」は大和朝廷の発生という側面において近い存在なのであつた。

さらに、葛城王を慰めた「安積香山の采女」について、大久間喜一郎氏によれば、采女の制度はもともと中国の制度に学んだものであるが、大きく異なるのは、彼女たちに人質としての意味があつた点であるという。¹⁴ 日本では地方豪族の娘で、容姿端麗なものが貢物として献上されており、大和朝廷に従属する証の意味をもっているというのである。(しかし『日本書紀』などには、陸奥国から采女が貢進されていたことを裏づける記事はみられない。むしろ『続日本紀』の「令筑紫七国及越後国簡点采女兵衛貢之。但陸奥国勿貢」の記事をもとに陸奥国は、はじめから采女を出さなかつたと考える説が多いとのことである)『安積沼』において、巻五でとらわれの身となつた鬘児に、そうした采女を彷彿とさせてくれる何かが存在するのではないだろうか。また云う、巻三で死んだお秋は、「移ろいゆく」存在である波門に雅びやかな風情すら読み取つてもいるのである。

ならば、まさにこの物語の背後に大和朝廷の征服のモチーフが込められていたのではなかったろうか。物語はその意味で、大和国から陸奥を経て再び大和国で大団円を迎える。これが私の想像である。今こうした想像を巡らすとき、果たして確認されぬ典拠のなせるわざか、はたまた京伝個人の指向によるものなのか、思いはつきないのである。

注

(1) 一例をあげるなら、『山東京伝全集』第十五巻解説で徳田武氏は「構成に關していえば、山井波門の仇討ちという主筋と小平次の怨霊譚という傍筋とがあまり有機的に結合してははず、部分的な趣向には面白いものが見られるが、筋の組織性にはいまひとつ不十分なものがある、というのが定評となっている」と従来説をまとめておられる。

(2) 木村三四吾氏編『近世物之本江戸作者部類』（八木書店 一四六頁参照）。

(3) 大西光幸氏「翻刻『山東京伝書翰』」（ビブリア七五号）参照。

(4) 東洋文庫一一八『増訂武江年表2』三九頁、文化五年（一一八〇八）閏六月の項参照。

(5) 長谷川元寛『かくやいかの記』に既に指摘されている。

(6) 注1『山東京伝全集』第十五巻解説参照。

(7) 清水正男氏「復讐奇談安積沼」について（『文学研究』二三）、高田衛氏「伝奇主題の類型学・草稿」（『日本文学』二六—一〇）、佐藤深雪氏「復讐奇談安積沼」論（『日本文学始原から現代へ』）、同氏「近世都市と読本」（『日本文学講座5』）、大高洋司氏「『優曇華物語』と『月水奇縁』」（『読本研究』第一輯）などを参照した。また『東遊奇談』に関しては、相愛女子短期大学『研究論集』第四二巻に翻刻を行なった。ご参照いただきたい。

(8) ひしろ高田衛氏は注7に記した論考において、この点を重要視なさっておられる。

(9) 注1徳田武氏解説参照。

(10) 注7佐藤深雪氏「復讐奇談安積沼」論参照。

(11) 注7高田衛氏論考参照。

- (12) 便宜上、『和漢三才図会』をあげたが、いうまでもなく万葉集やその注釈書も同様の記述がみられる。
- (13) 『辺境 もうひとつの日本史』（教育社歴史選書）参照。
- (14) 大久間喜一郎氏「安積香山の詠とその縁起」（万葉集研究第七集）および『上代説話事典』参照。またちなみに、今日、福島県郡山市にはこの采女伝承が、昔話の絵姿女房の形式をもって伝えられている。これは『安積沼』導入部との関連からみて興味深く感じられる。